

あのロボットを作った人に会いたい!

第15回 パワーローダーが持ち上げサポートする、パワーアシストの将来

こんにちは、千葉工業大学未来ロボット技術研究センター (fuRo) 研究員の瀬戸文美 (せと・ふみ) です。前回の「core」を見て、やっぱり大きいロボットは迫力がある! と感じた私。今回も大きいロボットを求めて、やってきたのは京都のけいはんな学研都市。搭乗すれば 100kg の荷重を持ち上げることができるようになるというパワーローダーを開発した、アクティブリンク株式会社の代表取締役の城垣内剛 (しろがうち・こう) 氏と代表取締役社長の藤本弘道 (ふじもと・ひろみち) 氏にお話を伺ってまいりました。

瀬戸 文美

(千葉工業大学・未来ロボット技術研究センター (fuRo))



アクティブリンク株式会社の室内中央に、まるでご本尊のようにそびえるパワーローダー。双腕が圧倒的な存在感。

それぞれ違うテーマから「二人でやったら何とかなる」に

新幹線に乗って京都駅に到着し、そこから私鉄に乗り換えて、さらにはバスに乗り換えて、やってきたのはパナソニック株式会社の先端技術研究所。あれ? 今回訪問するのはパナソニックではなくアクティブリンク株式会社だったのでは?と思われるかもしれませんが、実はパナソニックの先端技術研究所内の一室が、アクティブリンク株式会社。『パナソニック・スピニアップ・ファンド』という社内ベンチャー制度を利用して、アクティブリンク株式会社は2003年に設立されました。面白い事業のアイデアを社員から募集し、社内ベンチャー企業として事業を立ち上げさせるというこの制度、しかし何故そこで、パワーアシスト機器を開発するアクティブリンク社を二人で立ち上げることになったのでしょうか。

(城)「二人とも、社内ベンチャー制度に応募していたんですね。でも私と藤本は、もともと全然別の部署で全然違う仕事をしていましたよ。そして応募していたテーマも違ってました。私は半導体の設計システムの開発っていうのをやっていて、応募していたのも半導体について。そのテーマは最初は『面白そう』ってなったんですけど、お金の計算をして本当に儲かるのかって話になると、どんどんしぼんでいって。そのときに、彼がちょうど横で」

(藤)「私はモータの材料の開発をしていたんですよ。で、私がパワーアシストシステムの提案をしていたんです。その当ても、大学でパワーアシストスーツが研究されていたじゃないですか?それを論文で見て、これだったらできそう、事業になりそうな感じだし、ニーズも出てきそうだなって。そして社内でプロジェクトを立ち上げるよりは、ベンチャー制度を利用した方がすぐにはできるだろうと思って提案したんです。けれども、もともと材料開発をやっていたので、何をどうやっていいのか分からない。そんなときに城垣内さんと会ったんです」

電気電子工学科出身ということで、入社後は半導体を扱う部署に配属されたのですが、実はかなりのロボット好きで、大学時代はロボットアームの制御を研究されていたという城垣内さん。しかしロボットをテーマにして、ビジネスが展開できるとは思っていなかったと言います。そしてロボットに関して門外漢ながらも、ロボット技術を用いたパワーアシスト機器の事業化を模索していた藤本さん。その二人が隣合わせで、それぞれのテーマを提案していたことで、アクティブリンク設立への道が

なりました。

(藤)「城垣内さんといろいろ話をしているうちに『一緒にやりましょう』って話になって。城垣内さんがやらへんのやったらやめようかなあ、と思ってたんですけどね。自分一人なら耐えられへんやろな、でも二人でやったら何とかなる、と思って」

そうして二人が代表取締役となってアクティブリンク株式会社が設立され、パワーアシスト機器の事業化への第一歩が動き出したのです。

ターニングポイントは愛知万博に

こうして二人の協力によって社内ベンチャーの設立までは何とかこぎつけたのですが、そこに設けられたのが1年間の『保留期間』。その間にパワーアシスト機器の研究開発を行い、本当に事業化できるのかわかるところを試されたのです。毎週のように何か新しい成果や機器を報告しなければならない日々だったと言いますが、そのときに得られた経験と人脈が、保留期間後の会社運営の基礎となったのです。そしてさまざまな試作品を作ってプレゼンをしていく中で、開発すべきパワーアシスト機器の姿が見えてきたのです。そのターニングポイントは、2005年の愛知万博でした。

(藤)「会社創業のときには介護用とか言うてましたが、本当に思っていたのは一般的な作業に使える汎用機。現在あるフォークリフトなどの重機と、人手の間をつなくようなものがあるんじゃないかっていう話をしていました。会社をやりながら、そういうニーズを調査して明確にしていって中でも、やっぱりそういうものが必要だと。そういう流れの中で、愛知万博があったん